

アメリカに行ってきた。2年ぶりのアメリカ本土上陸だ。その前は1年ほど前に放送されたTBS系の番組で東京千代田区界隈の住宅事情を解説したことが布石となる。田園調布、松濤、白金台と有名高級住宅街はいろいろあるが、その中でも千代田区のこの一角は別格のようだ。「この辺の住宅環境はどうですか？」とカメラを向けられた散歩中の地域住民はこのようにお言葉を発せられた。「成功した人生の象徴のようなものです、ウフフ」

なぜ日本人は千鳥ヶ淵に行かないのか

反日のTBSなのでこのように言わせ、それを選んで放送することで国民に反発感を見せつけるやり方は全部お見通しである。放送内で「ちどりがふち」という単語が出てきた。千鳥ヶ淵戦没者墓苑は環境省が所管する第二次大戦の遺族に引き渡すことができない遺骨を安置している」とある。無名戦士のお墓となるのだらう。このすぐそばに住んでいる。戦後、積極的に富の再配分を拒んだのかもしれない成功した人生の象徴たちにはまったく興味を持つことはないが、身を挺し日本を愛し、妻、子供、親、兄弟を愛し、満足に食べることもできずに日本の将来を信じて敵と戦った戦士がいる千鳥ヶ淵に自然と足が向く。

その機会は、甥っ子の結婚式もあり昨年末に訪れることになった。到着して驚いた。その広い敷地にいるのは私一人だ。間違えて皇居に来てしまい、本館はどこかな？と探したくらい。小一時間くらい居て私以外は日本人1人とヨーロッパ系が2人だけ。施設には君が代の歌詞にある「さざれ石」もあり、その小石が巖となり……。

ここにいと東京のど真ん中にいることを忘れるくらい静寂な時を過ごすことができた。確かに千鳥ヶ淵の知名度は靖国神社と比べると、それほどでもないのは事実だ。それにしても訪れる人が少な過ぎる。戦後の正統派の反日教育が行き届いた成果なのだろうか。

その後、年が明け2月にアメリカの首都ワシントンDCのアーリントン国立墓地(正しくはバージニア州)を訪れる機会があった。このアーリントンは靖国と千鳥ヶ淵を合わせた施設だと理解している。今でも毎日

アメリカに行ってきた

Vol.120



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

30遺体が埋葬され2040年までは施設の拡張が可能と聞いた。訪れたその日はまだ肌寒かったが、アメリカのために戦った兄弟、父、息子そして母、娘たちに会いに来るツアー客数はおよそ1000人。ドイツ語、フランス語、中国語などが普通に聞こえた。ここにいる人たちはアメリカがアメリカだけではなく、世界の平和維持のために戦ってきたことを理解

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

しているんだよな、だからアメリカ戦士を敬う気持ちになれるんだよな、本当は反米主義者なんか存在しないんじゃないか?と思うくらい多くの人が訪れていた。

日本人もいた。でもなにかが変だ。敵国だった戦士が眠るアーリントンに来るのに、なぜ多くの日本人は千鳥ヶ淵にはいないのだろうか?そうか!今の日本人は日本のために死ぬことはできなくても、アメリカのために死ぬことができる訳だ!やはり戦争に負けた歪んだ教育結果なのではなか。

日系人の発言力が弱くなることはどういふことか

どれだけ正しくても、高尚な志を持っていても、戦いに負ければすべてを否定されてしまう。そう思うと、この73年間、ハンカクサイ国々と戦わなくても良かったのかなという思いもある。今度戦う時は徹底的にコテンパンに再起不能にさせるくらい勝ってみせる!でないとな戦いはやっつてはダメなのだ。もちろんアメリカとのアライアンスは当然である。サッカーの試合や今回の冬季オリンピックを見て感じるのは、日本女性の方が日本男子よりも闘争心が高いような感じがする。大戦中のソ連

もそうだったが、女性戦闘員をどう育てて、活用するかがその勝敗を決めるのかもしれないね。

LAに最初に立ち寄り、お墓参りをしてきた。子供たちがグランパと呼んでいたヘリーは08年に亡くなり、グランマと呼ばれたスーは13年にこの地で亡くなった。LAX(ロサンゼルス国際空港)から車で1時間くらい東に行くとアメリカ最大といわれるローズ・ヒル墓地がある。YAMASHITA、INOUE、SASAKIなど多くの日系人の名前を読み取ることが出来る。

ヘリーは二世、スーも二世だが、戦争前に日本に帰ったので帰米二世と呼ばれる。戦争前後の日系二世の苦闘を描いた1984年大河ドラマ『山河燃ゆ』の登場人物そのままの人生を送った人たちだ。彼ら、彼女たちの涙なしでは語れない努力もあり、戦後の日米関係が決して悪い方向には進まなかったのも事実である。

ただ戦後日本は多くの日本人をアメリカに送らなかつたし、現地の日系人も日本からの移民よりも今いる日系人の名譽と地位確保により強い方向性を持ったのは事実だ。

その結果、ベトナム戦争で派兵に協力した韓国やフィリピンからの移民が多くなり現在その数は日系をはるかに超えることになる。そうなる

と相対的に日系人の発言力が弱くなることは我々に都合が良いかどうかは、慰安婦像など今のアメリカ社会で明確に示されている。

日本人は傷つけあうために存在するのか

北海道に帰り千歳のある回転寿司店に向かった。何か千歳に用事があるときは、必ずといっていいほど立ち寄る現代日本食文化の象徴である。

この店の寿司はおいしい!と本当は言いたいところだが、行くたびにネタが小ぶりになっていたり、10秒前まで冷凍していた?と思わせたり、たぶん業界としては淘汰される寸前の店であろう。

ではなぜ行くのか。隠された名品があるからだ。一個150円の茶わん蒸しがものすごくおいしい。素材も汁が天然食材から抽出されたのか?と勘違いさせるくらいの絶品である。入店すると必ず2個頼み、列車で運ばれる寿司はそこそこにして、シメにもう一個150円の茶わん蒸しを頼むのが楽しみなのだ。茶わん蒸し? お前はお子ちゃまか?と言われると、そだね〜とカーリン姑娘の様にお答えることにします。ただそんなカワイイやり取りだけではなかつた。この店に車で乗り入

れた時に純粹な日本文化の一端を垣間見るようになった。お店の最初の入り口は手動で開け閉めして、店内側のドアは自動になっていて典型的な寒冷地対応の設備に違和感はなかったが、車から降りる時に行動が目についた。

50歳くらいのさえないオヤジが入り口のドアノブに手を取りドアを引いて入った。次の人が3mくらい後ろにいて、閉じようとしたドアにつかりそうになった。よくある光景だ。気になったので少し見学した。次は店から出る人たちに似たような残酷シーンを見ることになる。

北海道だけの話だろうか? 残念ながら日本の大都市でも普通に見られる富を作らない小作人根性文化の象徴だと思ふ。豊かになった日本の親は子供に何を教えてきたのだろうか。日本人は日本人を傷つけるために存在するのだろうか。アメリカに3週間いたが、このような光景を見ることはなかつた。入る人、出る人がアメリカ人であれ、アミーゴであれ、黒人であってもドアは次の人のために開けられている。さすが清教徒が作った国だ。改めて感心した。などと安倍はダメだ、トランプはダメだ、改憲はダメだというのが、当然の権利でかっこいいと思う反日がまかり通る国に戻って来た。